

土屋 正義 編輯

繪本石山軍記

第三編

二

遠世
2269
22



14
2269
22



繪本石山軍記第三編卷之二目錄

○羽柴鈴木小野原ふ初度闘戦相引

並 信忠猪子を以て秀吉の軍慮を聴

○秀吉夜襲を察して軍を配ふ

並 重幸八陣を布て秀吉を圍む



繪本石山軍記第三編卷之二

土屋正義 編輯



○竹中半兵衛堀尾八陣を破す

並 小蜜茶法師木村又藏討る

○重幸下間頼廉の勧めを悖る

並 重幸激流入入水して生死を敵ふ

諸も這時三位中将信忠卿八井川東の岸小御陣を居らば斥候と以て羽
 柴鈴木の軍戦勝劣動搖看さし給て羽柴勢丁々敗軍を見り隊伍打
 崩され由注進せしは信忠聞召て駈き給て夫援助を入し指揮給へ
 惟任光秀惟住長秀六千余人の勢を卒し既小川岸端小臨し所へ石山
 の援兵と看へ其勢凡五千許りの人数南無阿弥陀佛の旗三千余流地
 より空吹春風小翻し曳々声にて押来るに危や今に大合戦小成ぬ
 ん愕然と云者カし時小鈴木重幸如何思ひ人急小扯貝を吹

立鐘を鳴一軍兵を續め陣脚を正一小野原の本陣へと引取ける亦秀吉も
敢て追討を懸て引貝鳴して勢を續め野陣を堅め休息せしめ寂然と
志く備へりるに誠は雙方深慮不測の名將ゆへ凡智の視る所念ふ所小
異ある勝敗決せぬ中相引をたす這時中将信忠卿の軍勢も合戦相引小
散れりしと聽惟住惟住も川を越ず再び本陣へ扯入るまば信忠卿ハ秀吉が
計ふ軍配一圓訝しく思ふまはれど郎等猪子兵助を以て秀吉が陣遣
ハ一問せ給ふ様敵將重幸何等の謂うや勝小乗べきの凶を外軍を續
むるは奈何なる謂ぞ秀吉答へて稟ける様ハ是ハ則ち信忠卿の御勢
川を距べき形勢を省て候へど前後を襲えぬまはれこの用心かり猪子兵助亦
問て曰く石山城より後詰の勢五六千重幸の戦ひを翼んとま中将殿の御

勢川を距とも然許り恐る小速バざんら秀吉打笑ひて躬を起し戦の
場所指ざり示して彼者給へ小野原清水の東北小宿又莊の杜と稟まあ
り此杜の中に兵を伏置たる三百人ハ埋伏たるべきなり某鈴木が謀達を
知れるゆへ杜は添て兵を引と見せしより重幸杜の中伏兵有んと疑ひ勝
軍を收めり引取り某却て此杜の中は一個も伏勢を構へ置を渠に
非ず餘の敵からんまは伏勢を置て打破るべし是敵將の甲乙を測量
なして設る計畧も亦輕重あり猪子兵助亦問て曰く重幸の勢引
退く時追討懸れど勝利有べきに足下之を為さる意ハ如何秀吉こ
ゝて然バ候へ介時ハ當つて中将の御勢河岸に臨み既し川渉んと
す某逐べき勢を假なば御勢悉く河打距て某が戦ひを加勢給えぬ

大將の御陣無勢と成べし重幸能敵兵の無有を量察すまき石
山後詰の兵と謀れ合し重幸把て轉して河を渡り中将殿の本陣討
入ん辭其鏡小懸て見るの如く依て自然大將の御身に過ち有らば重
幸如き者幾許討取して何の所益の之あるべきや此を以て某故意軍
を納め御勢の河を越るを止めり猪子兵助秀吉が軍議を聴て忠勇
英智の論小感嘆し實小脱目なき軍算を承り俺輩の後学骨身
に深て忘失すまじき辭を候ふ此旨中将殿の御聞え達しなば定め
て感賞浅くもまじき猪子ハ直様御本陣へ歸り詳し如此々々の
言上せしべし信忠卿も秀吉の軍慮を屢感激すべく給ひ
るしとぞ

秀吉夜襲を察して軍を配るまき重幸八陣を布て秀吉を圍む
借も羽柴筑前守秀吉ハ其夜陣外を自ら看廻るに月季の關不
曇立添ど小野原の敵營小當りて兵糧を炊ぐ畑空小立昇る秀吉是
に屹と目せ附原来重幸此方の陣へ夜襲を懸る設かると急ぎ
陣中へ立戻りて淺野堀尾蜂須賀中村の徒へ夫々手配りを下令し
て近習の士片桐助作を以て信忠卿の本陣小遣へ敵將重幸令甲
夜秀吉が陣を夜襲仕懸る渠奴の結構秀吉暇と看届けて候ふ尙
も合戦始り候ふとも君決して御勢を分らし御助勢小遣を稟
すまじく候ふ秀吉不肖も候へども勝く鈴木如き浪士者小敗軍ハ
仕る間敷候ふ最も御本陣無勢小候ふては軍中の巷如何なる怨

ゆや出来せんも量り難く候ふ且這辺住居の農民們ハ一向宗門の者
多分候へむ暗小石山と計議を合せ奇兵小使を遣ふ計
御油断なく散兵止り堅固小御陣護り給ふ様大将へ直々稟
上させら既小手配り行度りしう去や當敵重幸を討ん緯今甲夜
勝負の一挙に有と主従準備十分小待懸り鈴木源左衛門尉重
幸ハ素より陣没と決せ緯中再び石山へ歸る所存なく願は信
忠秀吉と討課せ黄泉に到る思ひ出とけり尚余らず當敵秀吉小
俺志願の一言を告んものと先勢を両手小分隊鈴木孫市郎志广
與四郎を一手の軍將と其勢二百余人鳥銃火箭松明を多く
持せ夜も三更と思ふ刻川を渉せ信忠の本陣へ夜襲せむ恁て重

幸ハ五百余人真先小進根来の小密茶回く五百余人を後隊とし
て引卒小たり石山より来りし援兵を陣所小留り奇兵を爲し先
重幸同時小衆軍の鳴を静めて秀吉が下居の野陣へ押寄り這時
羽柴が陣所へ焚棄る松明篝火も消々に滅り準備の有とも着
へざり々れ鈴木勢餘波を上ると等々重幸鞭を上げて馬を跳させ
衝と陣中へ突入見るに彼空蟬の形のと留り旗指物ハ樹木の枝
に括り着敵兵一個も着へざり々れ南無三宝秀吉が計畧小俺と羅り
て踏入るぞ急引んと為せ着濟狭い討にせん計較なるは手動
かど却て敗軍をせん這俟茲とて隊を立敵の方策を見物せよと根
来小密茶が勢と一手小成立地隊伍を八門小立静り轉つて控へ居る



玉堂画

羽柴鈴木
小野原よ
決戦の図



ハ誠ニ希代の名将ト云々世人聴傳きつつ美譚びだんトカサリ抑此八門乃陣ぢんト謂法立々上古黄帝の臣風后氏ト云者天地風雲龍虎長蛇の八の物を假小象リ々之を陣門小配ぢんもんせうはい一蚩尤ト云者を涿鹿の野に滅せり厥まろち三國の時世小到て諸葛孔明此陣法を考究一魚腹浦永安宮の南灘水の沙の上に石を置み々八陣を布人有て此所を隈り小犯せうはんを八陣変へんして八八六十四門トあり敢て破つやぶと出る絆ひきを得ず常り風雲蔽おほひ重り々神の護する者の如ごとく云重幸此八陣小比較ひきま一茲こゝに天覆地載風揚雲垂龍飛虎翼鳥翔蛇蟠へびまと列ね重幸則ち中軍小馬を立敵の起るを待々所々四方八面悉く羽柴はつちが伏兵天地小夷ひらく関を作りて左り方よりハ淺野長政中村一氏右方よりハ蜂須賀正

勝小寺孝高後方よりハ堀尾茂助吉晴前側よりハ羽柴筑前守秀吉ひら旗本勢を以もつて群り寄數千の炬火一同小照耀あきの風上より霞葦あしに火を放ち一々ば原来硫黄焰硝りゅうわうえんせうを注ぎ入いれと水を炎ほ八方小彈たまを騰たり重幸が隊に火勢蔽おほひ懸れども陣法の奇特きせきや頭あたまハ一々ん火の為ため小犯せうはんも絆ひきりく楯たての下に鎧よろいををを息いきを詰つめて差控さきかへり々時小重幸陣前小馬を馳出はり羽柴筑前守ハ何方小在ありや鈴木源左衛門尉見参けんさんせんと高たからうに呼立よびたてに々々秀吉も同おなく陣頭小馬乗出まのり一々右みぎ加藤虎之助かとうこ片桐助作平野權平かたがはのすけさくひらのけんへい左ひだりハ福島市松加藤孫六脇阪甚内ふくしまのしむらがたのまろはたけのしんない何方いづれも劣せうらぬ脇股わきまたの壯士さうし我一ひと小重幸せうしゆんを手捕てとらへんと秀吉ひらを守護まもり馬前ばぜん引添ひきぞふ重幸是こゝを着きて馬上ばまうの禮れいを行なし聲打こゑうち放はなつと稟まうり々々

嚮小秀吉の戦書と辱ふ一殆備迷闇の雲霧を開き出城して茲小
足下と對戦し快く陣没と遂んと欲す儲更め稟すに速く雖も本
願寺門主顯如上人素より内府信長小對して隔意を狹まらず繚曾て
かく數年謀計を構へ兜冠と成るは其一個の所為を怒すすめをかり
足下愍情と垂なば俺首級を内府公へ獻ト公の積年の憤りを和らげ
哀れ本願寺を立置るべき旨足下の推挙給たりに於てハ重幸死後の本
懐此上なるとん只願足下の德行仰ぐにこそと詞恭めて憑くとて秀
吉言に應じ答へて曰く汝が云所其行は異なり陣没を期して俺と
對戦せざるを明く小正兵を以て向わずや比與至極の夜襲を懸て斯
秀吉が謀中に陥り尚虚言を吐く人を欺くと為るや無益の詞を費

さんより汝が依頼の念佛を唱へ罰刀の頭小到るを待べしと朝と突
つゝ罵恥しむれハ重幸聽より大きに怒り噫むまたり猿面冠者死
生を諍ふ戰場に臨み正偽の議論を撰むべきや汝の主なる信長と者天
廳勅宣を蒙りし朝倉淺井と和議の誓書も信長腹黒く反古とな
して兩家を倒して國郡を奪ふ斯ても信長運小乘ざるゆへ余非を云武
將と稱す夜襲を比與至極と卑なば信長の奸惡比與至極せり俺本願
寺の為に戦争すれど汝主従の如く破誓変約して非道の掠奪する繚
なり比與呼り奇怪千萬實の武士の鈴木が手の術受て者トやく罵も
敢ず鎗を捻つて突来りなまば秀吉も心得馬を馳寄双方鎗打合一突
合一が羽柴が昵近加藤福島片桐平野脇阪が輩主人の躬小過ちあり

てハ後ハ悔とも詮なからんと一同ハ左右より哄と喚ひ々穂先揃へて突
 入りまば流石の重幸も應ひ難く協ふ間敷とも思ひ入人馬を返して味
 方の陣へ飛が如くに駈入々々秀吉大音發して呼たりたるハ陣没期
 對戦ハ臨後蓬たも逃る陣やある耻を知返し合して勝負せよ
 と續ひ々後を追懸ゆる思ふ方策の地ハ引入と着て重幸ハ小高き丘
 に駈上り團扇拿く一回打招けが忽ち八方小開声を起し金鼓の響き
 天ハ夷き天軍地軍の兩軍卷寄秀吉主従ハ左右を圍めり加藤福
 島等是を着て大きに怒り近寄敵兵斬伏突伏猛虎の羊を喰ふ勢ハ
 出く打破らん戦ふ所ハ前より龍軍後よりハ虎軍の隊を進寄
 四方明口を、取圍しハ恰も鐵桶の中ハ有が如く秀吉心中大き打

驚き一が勇士末々まも指揮を傳へ突立打破らんと為れど這圍
 み推き出る綻能く此時淺野中村蜂須賀小寺の勇士各三百余人の兵
 と卒し左右より重幸が勢の中へ面も振ず斬入々々風雲鳥蛇の四軍
 一度小変して二十二隊の備をなし四隅八面より群り懸り鳥銃を飛ト
 箭を放つ綻恰ら横ちぶきの雨の如く羽柴が軍兵討る者數を知ず淺
 野蜂須賀ハ口惜き綻小思ひ烈く手勢に指揮を傳へ一方を斬崩さん
 と力を合させ兩勇真先小馬を梁らせ鎗引すごき々突破々々憤劇突
 戦暴立れども唯雲霧の中に戦ふ如く敵兵ハ潮の打覆すが如く突共
 斬共先操入替夥き勢の様着に々々斬脱づきの活路も似く流石武功
 鋭き秀吉も鈴木ハ八陣小圍に伏し今や此難軍小陣没やをきんと

其危急の程云計りもな

竹中半兵衛堀尾に八陣を破す並び小密茶法師木村又藏に討る

金鐵の地姓乃堅固も火小鎔烈火の勢も水に防げ官ず焼失の憂を脱
遁る人の智術智畧も之と等しく秀吉が明智の識量を以て先小齋藤
家征伐の砌より軍師竹中半兵衛重治と説得入遂に羽柴が家の遊容
秀吉も深く其謀を宏慮と感伏せしり始終諸所合戦の場を召
連より故小令般も從ひ来りし所敵將重幸八陣を布設し秀吉を布圍
しよりと看より馬を飛して後面に駈着堀尾茂助吉晴に指揮しなる
ハ今大将敵の八陣を圍まき之を推きて出る緝協ふまじし方軍兵を
牽て敵の風陣より入驀直に突通りて鳥陣を打破り左へ廻つて天陣

を駈抜效を折きて龍軍を突崩すぐ然有時ハ這陣法忽ち破きて
秀吉主従を救ふ到陣門の方角箇様々々と委く介順番次第を教
へつ些も速く急ぐし立ぬれ吉晴謹く介命を受け真先小馬を梁らせ
一声関を作ると看下ぐ彼風揚の陣を目的とて真一文字に突入捲り
立次小鳥翔の陣を駈破り軍師竹中の教如く左小廻りて天覆を駈抜
龍虎の陣を落花微塵と打立まば忽ち八門の陣破落々々と亂れ右往
左往小崩ま出けま秀吉主従得り賢く叱声憤声天地を貫き當て
幸ひ斬捲まば鈴木が兵卒一圓小紛噪し暴風小落葉を散す如く大
顔も小顔も立て四方へ散亂してて敗走す

竹中半兵衛尉重治ハ博く和漢の兵書小通下兼て天文を察し

地理に精しく人中の龍なりと稱譽せらる原重治ハ美濃國の住人岩
 手と云地の城主は齋藤家の麾下たりしが右兵衛大夫龍興が行
 状を見限り領地居城を棄て浪士となり山林小幽栖して花月を友と
 一天然の壽を樂み暮らるる秀吉重治の隱遁を惜むの余り余草
 廬を訪し屢勸め遂小俺郎小迎へて寓客として暗に秀吉も軍學
 兵法の師とす且片桐加藤福島の壯士も秀吉竹中の弟子と憑り海
 内奇絶の英雄と整へ八全く重治誠心の教導ゆかり然ハ斯る博
 學なる重治なれど八陣の組立変隊六十四門平日に心膽徹して自發
 せりば亦之を破摧の法も考究して今堀尾小介秘術を授けたり
 噫重幸と謂重治と謂立るを知れを立るを破ぶるを知實小古今軍

師の龜鑑と云ふ這兩將とぞ止めたりけり

斯り一かば鈴木源左衛門重幸ハ布列ねる八陣を破らき味方の勢
 粉の如く打散され心ぬぐも七八町許り人顔雪小列て敗走し頓り
 施すまき術計もたなく今ハ此身の死すまき時刻と逃る味方小眼を懸す
 まき馬の頭を立直して遼小東を看遣りりまき黒み掛りて後追來る
 羽柴が兵を縦横小捺り倒し一條の血路を斬開き逆散し駈來る武者
 あり是則ち根來山の剛僧小密茶かり重幸の前小馬乗寄せ鬼を欺
 く暴法師も两眼より瀾然と涙を落し大息吐て重幸に稟しなると
 敵兵圍みを破つて却て四方を取巻容易斬開くべき所もなし今ハ
 や軍師も俺們も最期の際小成て候へ軍師石山へ歸陣の御心方々

此戰場を立退給はずんバ敵兵大勢来らざる間小御心静小御屠腹有
 間欲一敵勢来りて亂妨働うば貧道命渥り小防ぎ支ゆべーと云重幸
 莞尔と打笑つ夫稟す小や違ぶぎ最嗚呼がましき言緯なれ共石山
 の城中に於てハ聊敵小名を知り鈴木重幸何條匹夫下郎の刃に罹
 り後代小死期の耻辱を殘さんや貴僧俺緯ハ心と為ず存分敵中に斬
 入て大将羽柴秀吉小近着寄差違へて陣死せむはようし死ハ貴僧と
 俺遲速有とも是今生の別をかりたり冥途に於て再會せん云間も
 有せず羽柴の軍勢盈潮の涌如く追来り関を一同小作り進寄小
 密茶馬をバ立直一太羅刀を水車に振廻一群来る大軍の真中を目
 指しせつと喚ひく梁り入つ或は胃の天平よりずばと斬下兩段となし

横一打拂了ぞ鎧ひらる武者胴切小斬倒さき瞬く間小敵三十余人庭
 端々々と難落す形勢摩利支天の暴るに等く縦横無盡に駈散
 せぶ勇み進める羽柴の軍兵們小密茶一個小切捲らる四方へ撥と退
 きたりける小密茶勇勢倍々加ハリ如何も一秀吉小近着寄首級
 を拿て死出の手柄小せ軍師も今期の歡びかふんと鎧踏張遙に望
 めバ向ふの方に千生瓢箪大馬印一朝日小輝き端麗々をバ羽柴が本
 陣がざんかゆ一鞭當て蒐行所小淺野中村蜂須賀小寺の軍勢楯
 の板小釣鐵を設け五六按死繫き合せ押列べて兵繰出すハ恰も城の
 小女垣の如く悉く其楯板小狭を開き内より弓鳥銃を以て打立れ
 ば是なん實小亂軍の中に忽然と城廓揺ぎ出せ一如くさしも剛勇

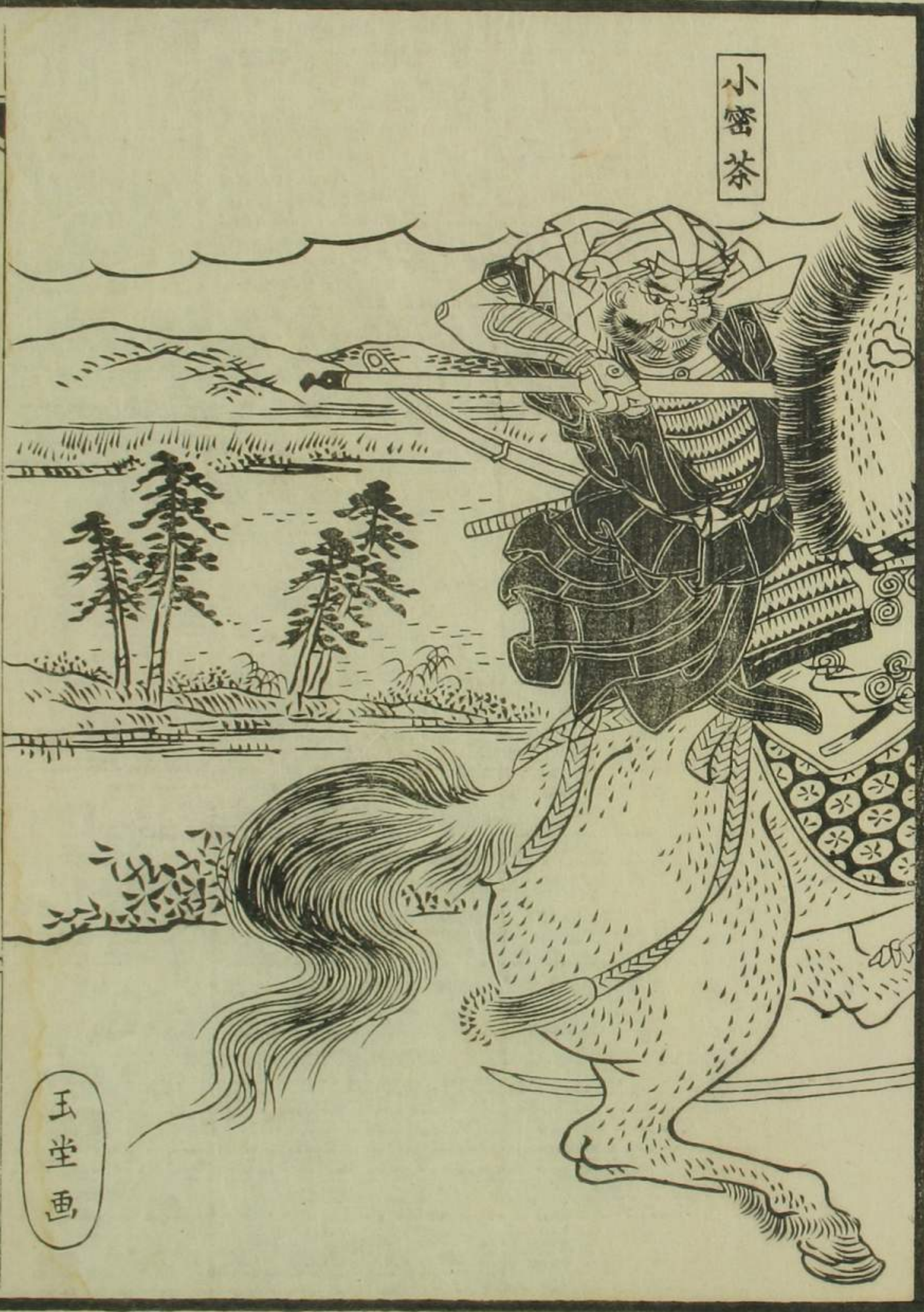
不雙の小密茶も駈破るべき仕様もなくて敵の死骸を片手小引被
 き持楯の替りとして振立振廻し右手に薙刀拿て矢玉を拂ひ楯際
 近くも進み寄り時小羽柴方の兵士の中より黒革の小具足に鐵の
 半頭着たる大兵逞しき黒栗毛の馬小跨り四尺余りの大太刀拔そ
 ぞ小密茶を小招きして曰く奈何夫へ来る生臭坊主よ物々敷拳動
 片腹痛し俺ハ加藤虎之助が良等に木村又藏と呼れたる日本無雙
 の大剛力の者坊主の相敵は勿体なきほど又藏の授る御剃刀請
 て来世ハ牛に生ねぬ用心せよ来きその首刎んと呼ばまば小密茶聴
 より却然と憤りシヤ案外千万非禮の過言土はせりせし俄侍士ゆへ
 鄙相模の小力量業以て凶は登りたる祿偷盜奴俺弥陀の利劍の

引導ハ一殺多生の悪戸除ひ閻王に代り現罰着せん卒々来
 まし罵返せば又藏大太刀を真向に挿し拜み討に振上打て懸る
 小密茶薙刀より受流し直にすゝの斬小附入を又藏も颯と躬を捻
 りて双方勝負が斬結びハ龍虎風雲を起し諍ふ如く一往一
 来虚々實々半時計り八人交もせば火水と成て戦ひくまは是や今日
 の見物にこそと兩軍共鳴を静めて見物又小密茶ハ又藏が武術勇刀
 中々謾り難き兵なれば謀計を以て討課せんと馬を轉して逃出一
 つまば又藏声懸蓬し返せし續いて後を追迫りつ二三段許り隔つ
 と着る所に小密茶振轉り様小薙刀拿の又藏が乗くる馬の前足
 陸離すんど斬落し々々か馬ハ展風を打倒すか如く乗くる又藏真

逆さまに墮ると者へ一が地を匍匐小密茶が馬の兩足雙手に掴み
力に任せて左手へ刎覆せど小密茶も惚ず鞍諸とも大地へ墮と落
々る所を又藏飛係つて二刀刺徹一乗跨つて首搔落せ一人間所
為とは者へざりにたり

重幸下間頼廣の勸めを悖る共重幸激流小入水して生死を蔽ふ
鈴木孫市郎志摩與四郎ハ昨夜子の刻重幸の指揮を受三百余騎
の兵士を卒して芥川の下流より暗小忍びて東方の土堤へ押渡り信忠
卿の本陣へ夜襲せんと思勢足音掠めて奇かり一が介間七八町小成
に逃びて先斥候の兵を出しめて敵陣の分野を窺ハ一むるり前小
羽柴秀吉より片桐を使し敵の夜襲を注進せしむ惟任惟任兩將

曾て油断せず胃の緒を鳥銃に火繩を挟み用心怠慢を容子
かねて鈴木志広ハ業に相違し責懸るべき仕寄もれく要時猶豫居
たりりるが早小野原清水下居の方には炮声矢叫びの音頻小聽へ合
戦既小始まり一者へて火光天小輝きて立上れ信忠卿の御陣も備
へて立驚破し言ハ馳出べきの形勢に鈴木志広ハ弥進し難く種々工
夫を凝し考へるが所詮全き勝利ハれ共此所へ信忠を喰留す
んバ芥川を涉つて秀吉が勢に力を殺せ戦ふ則ハ味方幾ど難義ある
べしと本陣より北方小當れる真土能因塚の在家小火を懸風の手に
乗して焼立々をば折節北山風強く吹て焰陣屋の上に霰ハ懸り
所々に関の声聞へるは信忠血氣の若大将力を馬小召れ旗本



小密茶

玉堂画



木村又藏

木村又藏
驍僧小密茶
を討取

図

の勢を引て陣外へ馳出んと給ふを光秀長秀鑣を取て引止進ら
せ敵の動静も窺もずして猥り小馬を出し給ふハ大将の好むべき所行
に非ず大将爰を動かせ給ふ味方の兵士散亂るゝ敵の謀中に陥
る緯眼前たり俺們兩個計策構へ置候へぞ唯中軍小在り諸軍
勢の噪立所を鎮め給へと諫めり信忠卿實もとて床几小懸り陣
中猥に立噪ぐ者あつバ軍法を正さんと御指揮あれバ光秀長秀陣
中を駆廻り一個もも騷亂致する者ハ大将の御前小曳出りて首を
刎べりと觸るる程小石山勢ハ八方小散兵せりて関を作り火を放
ちて劫せど織田勢ハ此も動ぜず隊伍を固めて納りかへり整々とし
て控へたるにぞ元來微勢の石山勢猥小押寄人も不覺かりとて芥

川東方南北なる此所彼所小徘徊なり了倘くも織田勢河を距ん
と其其虚小乘て打崩さんと終夜窺ひ居る共織田方堅固小本
陣を守りて既小余夜も拂曉小成るまば今ハ這所も在ても無益なり
と重幸が指揮せし如く後着らぬ内引小如くと鈴木志广ハ從兵
續めて竟小石山城へ引取小たり又石山の城中に於てハ鈴木重幸ハ
昨二月廿八日より島下郡小野原へ出張し未だ主從歸城せざりけれ
バ御門主最も安かば思し召長臣下間刑部法眼頼廣同く近江
守頼基を召ま汝兩個小野原戰場に趣き合戦勝敗の雌雄を論
ぜず軍師重幸を誘引歸るゝ尚も重幸小過ち有もせば如何
悔嘆し共余甲斐なり疾々到来しと急せ給へハ兩家長命を

畏りて六百余騎の兵士を率へ馬を飛して小野原へ廿九日午の下
 刻不到着して戦場の揺動見聞すれば味方の軍七裂八裁崩れ
 重幸ハ僅小三十余人の士卒を従へ小高き丘小馬を乗上敵の勢氣
 を臨み憇ふ頼廉頼基ハ恚と看るより馬より飛下つて前より来つ
 先恙なきを省て之を祝し頼廉勸めて稟しけるハ御門主軍師の
 歸城なきを以て深く心を痛ませりて憇俺們どもへ仰せ付らるる
 へ歸らるべき旨使命に候ふ息を限り小道を馳て漸く唯今參着
 せり憇倅軍兵引卒して候へど此場ハ某ホ小任すれ早々石山へ歸
 城なり給り御門主の御安慮し給ふ様賢察有ハ満足あらんと云
 つ馬の鑣を拿て後方へ振向引かへさせんとす重幸故意声あふら

げ是ハ正なき辭を曰ふもの哉石山方の然者有と知り勇夫の數
 中も入るる重幸斯許りの合戦に勝負も究むず比與も他人に戦
 場を譲り逃歸りし言まんハ弓箭執躬も大恥辱なり各皆
 寺院の守護職實の武士の腸ハ知るまじ似合ぬ戦場ハ長居せしり
 速く石山城小馳歸り特口を堅り間者を糺問し不虞の災を防ぐれ
 よう返すも城中無勢ハ心元なく早々歸られしと敢て圍猛り引
 留掌下を振拂へども兩個些も鑣を放さず頼基猶も勸めて曰く那
 ハ兎もあれ角もあき御門主の命承たる俺們得しそ此終歸り稟
 さんや使者小立する俺們をれを寥々歸る稟し訣なし卒去ハ諸
 共歸城仕らんし押して引向畢ふ折節 羽柴が軍勢曳々と関を作

り雲の如く渦き来りて皆声々小呼はりける石山城兵の勇名取
 る根来の悪僧小密茶なる者加藤虎之助が郎等木村又藏とよ
 者一騎討して刺留するを敵の残兵餘一あせそ手柄次第小高名せ
 よと衆口に罵り進み来る頼廣頼基以下大さ小驚き是ハ凡をぬ
 軍の風色よ何分軍師ハ歸城有べしと双方鎧の草摺小継り引立る
 を重幸怒つて振拂ひく群り寄来る敵の中へ三十余人の残兵を隨
 へ驀直しを駈入合戦ふ羽柴が軍勢ハ八方より鈴木と着るより
 追取圍ふ夫重幸の旗本たるを遁する討留とて呼はりて鎧の穂
 先を突列べしハ秋の野面小茂る篠薄風は靡き亂るの如きも必
 死を究る重幸主従大敵の圍に物ともせずおめと一声喚くと着

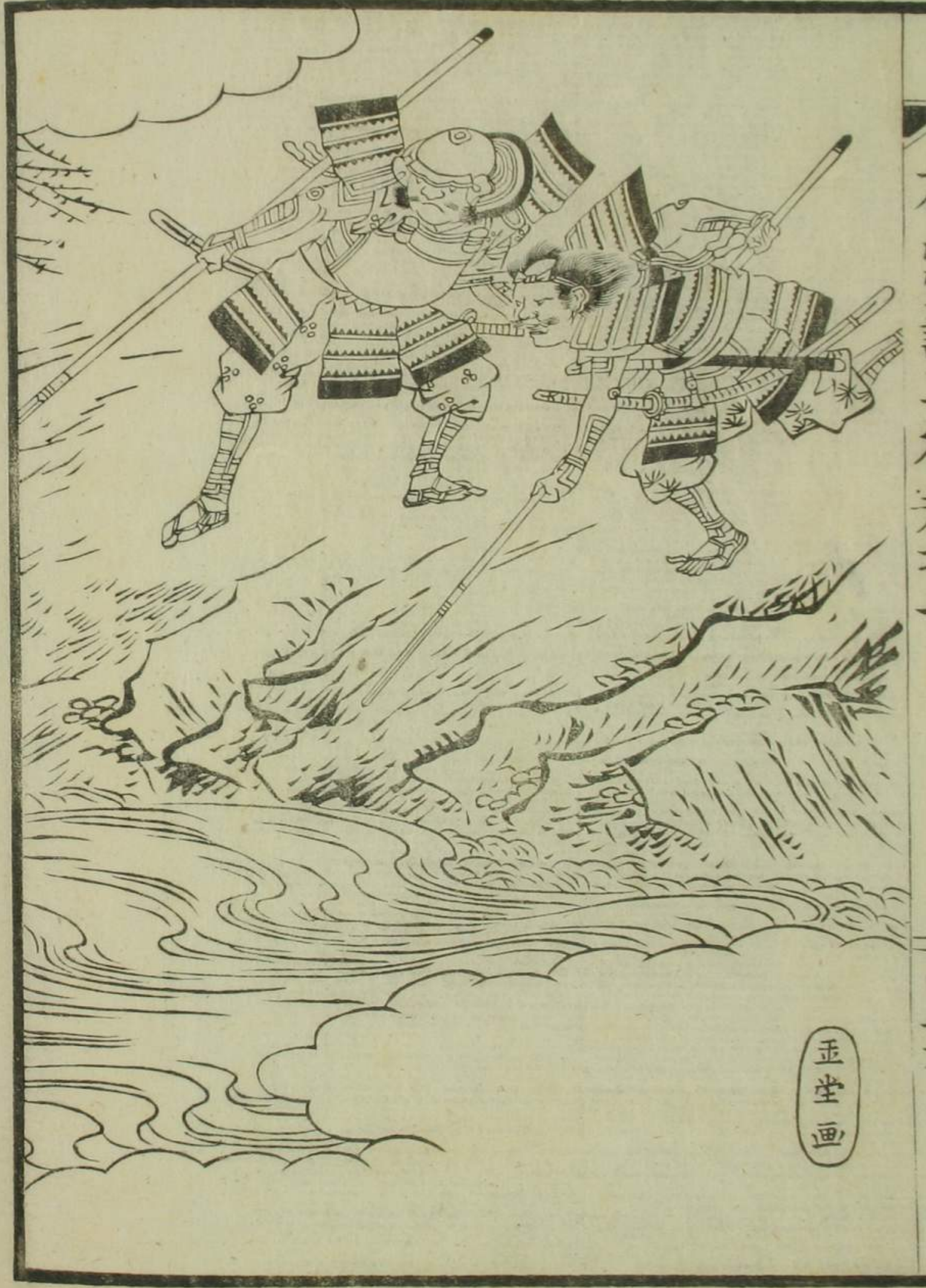
へ一が十重二十重小圍繞せし大軍を唯一捲りに駈破りて猶後
 より追來れる敵の中村一氏が隊を突崩し東小着ゆる大馬印
 瓢箪ハ秀吉本陣なりと着止ふるをば願ふ當敵討てやハ疾風
 峯越小吹下す如く馬を飛して駈行所小堀尾茂助吉晴見参し呼
 ハリ十文字の鎗を捻つて突来る重幸目利く鎗把直し堀尾のや
 不相織にて放れつものも斬結ぶ中へ誰撃於す鳥銃とも知ず
 一固の彈丸飛来りて鈴木が馬の平首を摺て遠彼方へと飛去り
 たり馬ハ是に驚きよりけん固より駿足の逸物なれを踊り上りて颯
 と駈出せば恰ら中宙を飛翔小異れに乘る重幸も之が為り敵
 の堀尾と勝負を仕果ず鎗を右手に脇狭み手繩を搔繰り駈る

促小者より居るをば下居宿川原壺井平田を過渡川端の西村小出
 にき下居より西村川端まで凡一里半の行程なるを這駿足苦もなく
 駈来しは名馬の働きと云る中も諸天善神佛菩薩の愍みに重幸
 が必死の戦場救ゆるもの乎重幸思はず敵地を去て喘ぐ呼吸を憇め
 居しが堀尾が軍兵們後を追て鈴木が残兵討取討散し重幸を逃さ
 トと競ひ来り西村の川端堤の上小馬を止めて憇ひしる鈴木重幸と者
 止るをば堀尾が軍勢左右を圍て再び遠箭を放つて射感然んと
 す重幸此も臆る容なく篠突ぶとき飛箭を切拂ひ手練小業し
 防ごころに敵の軍將堀尾吉晴士卒に命とて箭を止させ自ら真先小
 馬乗出し重幸に對ひ大音小呼を叫び曰くやれ重幸腕と聞け汝

も石山の軍師と呼れ軍法故實も能知れしる俺と一騎の勝負も
 仕遂ず馬を轉して後と着せ比與りも戦場を外して命を惜むは最
 見苦しけ況て我主羽柴殿へ答書を送り死を決ししる出張なげ
 や最早從兵も大概討ぬ何面目に生延んと為や俺今矢先小懸し射
 殺すところ一軍の將とる身分を愍み一騎討の雌雄を決せんと欲す再
 逃る繚勿れと呼たまは重幸大口開く赧然と突ひ俺逃奔れるの比
 與懐くハ出城して秀吉と對陣せんや併人ハ住居ハ尔土地を選
 亦死す期ふも尔因地を望む是往々博識人の心得なり燕雀奚ぞ
 大鵬の心を知ん優るも一騎討を望む尔方重幸敵小把て不足と思
 へど冥途の先案内しる召卒人卒来い勝負と鎗拿延れハ悪き

廣言ひろく尔おの腮はな留とどんと十字じゅうじの鎗やり先さき振ふ雷かみ々々双方ふたう秘術ひじゆつの憤いきどお勇ゆう激げき戰せん結むす
 びひ放はなれつつ火花ひばなを散ち果はも着つず打うち合あけけ堀尾ほりせが郎等らうとう猪股ぶたまたま
 金兵衛きんべゑ主人しゆじん吉晴きちはるの加勢かぜをせんせんと大太刀おほお太刀引ひ拔ひ横よこ合あより重幸じゆんこうの大股おほまたま
 目懸めかけ斬き付つる手て下した狂くるひて馬うまの右みぎの前足まへあし切き落おす馬うまは苦くる声こゑを發はつつ
 等らう躍おどり上あつつ倒たれれるる共とも大地おほちへ落おるる重幸じゆんこう早はや即すなはちの達人とくじん躬こみ
 を捻ひりり後うしろさまに飛除とびぞるる鎗やりの石尖いしつ以もて猪股ぶたまたまが左ひだりの眼まなこを丁てうど
 突つバ苦くると叫こゑんで後居うしろ小伏せうふく豕しのおとく呻うめりりり堀尾ほりせも馬うまより
 飛乱ひら離りと飛と下くだり重幸じゆんこう引ひななと声こゑを懸かて進退しんたい雲實うんじつ一往いちおう一いち来らい猶なほ
 も烈おしく戰たたかひひ々々が這時このとき如何いかななととり堀尾ほりせが持もちたる十字じゅうじ字じ
 の鎗穂やりほ先さき三寸さんすん許ゆるり打うち鉄てつて前まへなる川中かみちへと落お入いり重幸じゆんこう透すさず

飛懸とびかけつつカカを究きめて刺つ伏ふんとすか堀尾ほりせが郎等らうとう三四個さんしうご馳は着ち又また
 先列さきりへへ斬きて蒐あれれ其隙そのひま小吉晴せうきちはるハ起お上ありり樹蔭こかげ小寄せうよ息いきを繼つ
 くり重幸じゆんこう怒おつて猿臂さるべを延のび一いち個ご上う帯おび掴つかんでんでぐり差上さあ撞つ地ぢ七
 八間やちま投な付つけ々々ば蛇籠へびかごの石小頭いしせうづを的あてららるる腦なうみみを垂たりりて死してんんが
 重幸じゆんこう携たるる鎗やりを打棄うちす大手おほてを葉掌はのてて飛懸とびかけるる者ものへへ今いま一いち個ごを
 足あしを蹴け上あて一丈いちじやう許ゆるり空からさまに蹴け飛とせせば彼青柳かのあざやなぎ小添せうぞんふ鞠まりのおおと落お
 て轉まんん川かみの中な浮うつ沈しんんつ流ながれれふふり又また一個いちごの利腕りうづ搔か掴つかみみるる拿と
 いる太刀たををももぎ放はなちちるる左手ひだりてに脇狭わきぢままて一縊ひと々々水みづを眼まなこ飛と出で黒血くろち伐き
 吐出はなしし一声いっせう高たかく叫こゑんで息絶いきえんより羽柴はしば勢せう此勇猛このゆうまう小恐せうおそれ怖おそき敢あて
 近寄ちか者ものももゆゆく又またも矢玉やたまを放はなつつ討取うちとんとす重幸じゆんこう茲こゝ究き竟けいの場所ばしよ



正坐画

と思へど敵軍に向つて大音を放ち時運を觀ぜし鈴木が最期を省
置て後代の譚小せよと云し敢ず川縁小馳下るを我討取んと後
續く敵兵五六騎把て投除兩個を捕へて左右小縊付溺き立しか殿
川へ三間許り刎飛つざんぶと没しる余勢小水玉水烟り小溶る計り
再び姿は着へざりにたり千時天正六年二月廿九日巳に捕時の
入水なりとぞ行年四十三歳と云四十四歳と云未詳なり嗚呼惜むべし古今の謀士九年
の間石山の柱礎と成織田の大軍を孤城小引請千変萬化し籌策
施し偏に宗法立人の忠節肺肝を碎く瘴病災を醸す一時靈告の
夢に感して自非を悟て戦死を究め宗流不退轉の相續の爲余躬
滅し々基を固むる信と謂忠と謂義と謂本願寺一宗の忠臣なりとぞ

末世武士の規矩と成英傑更小名聞利欲を望まざる瘴亦最悼
むべき果にぞ有たり然程小羽柴が總軍恣と看るより敵將重幸を
入水かいたるぞ殘兵遁すを討取ると一同小勝開拳て追討むる小
兩下間賴廣の六百余人ハ散々に打碎りて我先し石山さして這を引
退くを余すまじとて追行所は時昔接兵とて向ひらる石山の軍兵
四千余人ハ重幸死後の手當小止り置んと夫々計畧を伸し合め
犀の本別所市場の邊へ兵間配りて埋伏せしめ下間勢の後追懸
て羽柴が軍勢来るを看るより犀の本小埋伏せし石山勢新し手千
五百人許り起り出左右より関を作つ懸隔く矢玉を聯ねて
放ちらば羽柴が軍勢驚き狼狽原來鈴木の入水ハ虚謀ふる

味方を釣寄手段なるといふ深入るまで大敗索めん疾々引返せよ
 やと叫立陣脚乱し悶擲をせば石山勢ハ其機を量りて夫斬
 込とて鎗襖を作り三方より押進と突入り羽柴勢も散々に崩さ
 ぎ手痕死人許多あるにぞ秀吉淺野蜂須賀小命とて嚴しく敵
 中へ鳥銃撃入少し白み余間を量りて士卒を續々隊を正
 し徐々本陣さして引取りをば石山勢も重幸小密茶陣没の
 よし注進聴より氣勢を扱せ軍なれど敵引取と追討を懸
 ず相引小神崎川を打渡り石山城へ歸陣なけり恁く羽柴
 秀吉ハ望のおとく重幸を釣出し自滅せしめ根来小密茶まで討
 得り一たび凱哥三度揚させ勇み小勇下居の陣拂ひて芥

川小つり信忠卿の御陣小参上し合戦の轉末審りに言上し小
 密茶が首を實檢り供ふ信忠卿深く感悦し其ハ數年父君の
 征討を打腦まし如法なき内軍立籠城も恁る癖者們的在々
 ふゆへかり夫を唯一戦の中に討取働き比類なき勲功と稱し給
 へば秀吉謹んで答へ稟さる様君の嚴威を以て軍に勝候へば
 鈴木重幸入水仕る形勢余首級を取らず候へばいまま全勝の合
 戦小ハ候はず原来渠智謀逞しき癖者水没と看せ石山より歸り
 名を替容を変て籠城し猶君の敵對の心や候はん殊小此所小
 長陣在し一不虞の災起らんも測りがなく且國中も騒動し一揆
 や企ん加之味方糧道も不便利小候ふ一旦御歸國有て然るをしと

いよ信忠卿這議所理と同せし水直ちに芥川を御陣拂ひありて
江島安土城へ還陣したまひ父君信長公へ軍の一伍一什審り話
説いたまへるまは信長此上なく讚賞有て年来の鬱懐を散せし
れけふ然ハあねど重幸入水の為体生死のおども定つなれど即刻
京都の京兆尹たる村井長門守貞勝方へ早騎ともり仰せ渡さ
ま澱川の下流水底深水へ數多水練の者を潜らせ入る普々重
幸が死骸捜させたまふと更る是と思ふ死骸も着はず實や宇治
水津堰の川水無瀬芥川外小流の落水までも急流とゆふ澱
川の廣水や大洋と流れはらんと到底衆評究りたれども倘
くは暗小存命ありて再回石山城へ歸りたるはや間者を入れて詮鑿

せし信長村井長門守へ御内意あり貞勝承へつて間者を仕立
種々探索して窺ひ着るに重幸の戦死相違なきや上人を始り
城中の将卒朝夕重幸が入水を歎き惜し上人自ら吊ひの法事を
ども最懇ろに執行せられたる上下の衆人愁傷の形勢寂莫として
哀れありと告貞勝聞て惟ひける様を謀士は能内外を欺く云
り死せしと看するは世評の押へ眼の睫を看するがぶと洛の内外
近郷近在るも却く姿を省し潜る驟りて大事を仕出さんも知る
かゝる疎忽ハ後日俺越度かりと急に觸文を廻して京摂隣國へ
廻達せし如く告げる様を今般摂津石山城の籠士鈴木源左衛
門重幸といへるもの去る二月二十九日同國島下郡小野原戦争の

砌入水を示し、生死を懸す、倘存命し、潜居たり、緜在所を告許
に、おぼふ者は、褒美過分、小沙汰す、なきなり、又深く、告戒、違亂のも
のは、急度曲事を稟し、付る、浴を勿論なり、片土鄙村、津々浦々の
濱邑までも、残る地所なく、觸達せし、恠まで、嚴勢、小查照ある、緜
偏小重幸が、智勇謀畧の衆、小起過ずる、器量に、恐れ、後患有ん、緜
を憚る故なり

自是羽柴秀吉は、内府の命、小依播磨姫路の居城、小歸り毛利
家所領の諸城、小進向し、或ひと討じ、不し、或ひと降し、武威中
國、小震ひ、々々、ば、毛利の属侯、羽柴小伏後、一就中、尼子の忠臣
と、ふ山中鹿之介、幸盛も、秀吉の仁智、英武に、感伏し、麾下に従

事、俱小毛利家と、戦争の傳統、く、中國筋、織田毛利の取り
合、天正十年六月まで、凡六箇年の連戦なり、石山一條に抱え、
ね、バ省畧す、依之、石山の攻戦止し、仕なく、翌天正七年四月まで
穩うなりし

繪本石山軍記第三編卷之二終

繪本石山軍記第三編卷之二

十四

